

ランビルヒルズ国立公園周辺におけるイバン族によるキノコの利用

山下 聡 (総合地球環境学研究所)

本研究では、イバン族の住民がどのようにキノコ（菌類の子実体で肉眼で認められるもの）を認識し、利用しているかを明らかにするために、以下の調査を行った。

2005年12月末から2006年1月中旬にかけて、一人のイバン族（男・60歳前後）の情報提供者と、Rumah Chabu周辺の二次林および村落から30km程度内に位置する複数の森林（オイルパーム園、ゴム園、焼畑休閑林、孤立林、原生林）に入り、2～3時間かけてキノコを探索した。見つけたキノコは採集してイバン名と利用の有無、利用するならばその方法を聞きとった。その後、この住民の情報をもとに18-50歳のイバン族住民4名につづりなどを確認した。採集されたキノコは、乾燥標本として保存し、可能な限り種まで同定した。

その結果、キノコは171個が採集され、イバン名で49種が認識された。このうち、ラテン名では39種であった。一つのイバン名に対して必ずしも一つのラテン名は対応しておらず、逆に一つのラテン名に対して一つのイバン名が必ず対応するというわけでもなかった。そこで以下、イバン族の認識に合わせて、イバン名を‘種’として集計した。その結果、49種のうち、25種が食用に、11種が利用されていた。利用方法をみると、7種が蚊除け（燃やして用いる）、3種が鶏の薬、1種が妊娠促進のための薬（まじない？）であった。しかしながら、現在ではほとんど食用としてのみ利用されているということであった。

また、情報提供者によると、キノコを採集するのは難しいため、キノコ採集そのものを目的として森にはいることはほとんどなく、狩猟などのついでに見つけると、それを採集するとのことであった。このことは、軟質のキノコは発生の予測性が低いことを反映しているものと考えられる。

一方で森林タイプごとに食用菌の種類の平均値をみると、オイルパーム園と原生林では4種以上、利用可能な菌では孤立林と原生林で、2.5種以上と他の森林タイプよりも多い傾向がみられた。利用可能な菌類のほとんどが、硬質の多孔菌類（Polypore）であり、多孔菌の種数が原生林や孤立林で多いことを反映しているものと考えられる。